
僕と俺の学校生活

ユララ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と俺の学校生活

【著者名】

コララ

【あらすじ】

一重人格の少年を中心としたお話。恋愛はまだまだ先の話で、コメディーというわけでもないかも・・・じゃあ、どんな話かつて?そりゃあ、読めば分かる話さ。【停滞中です。申し訳ありません】

(1) 僕と友×2

桜の花びらが一枚・・・一枚・・・三枚・・・

私立真質高等学校。

全校生徒およそ600人という私立高にしては比較的少ない人数の学校である。

その真質高校では入学式も無事終了し、今日から本格的に授業が始まつたばかりである。

「はーい、止めてえ」

そんな声で今まで机にかじりついて問題を解いていた二年A組の生徒たちは一斉にペンを置く。教室のあちこちからは「無理だー」と叫ぶ男子生徒や「ねえ、どうだつた? 私結構自信あるかも」という女子生徒の声で溢れている。

春休み明けの確認テストというものが今まで行われていたわけだ
が窓際の一番前の席。即ち出席番号一一番の生徒、青鹿名雪は絶望し
ていた。

「『僕』の馬鹿あ」

「」の少年名雪は一重人格だ。一人称が『僕』の場合は明るく人懐っこい可愛い系に部類される。そして、一人称が『俺』の場合はクールでスポーツも勉強もそつなくこなすカッコイイ系に部類される。しかし、そんな『俺』は『僕』が起こした不祥事の所為でことごとく苦労している苦労人である。

そして今回はテスト前までは『僕』が出ていたのだが『僕』には少々退屈だったのか寝てしまっていたのだ。問題を解かぬまま。まあ、寝ていて気付かなかつた俺も悪いんだけどや。

「名雪」

そう言いながら俺の肩にポンっと手を置いて哀れみの視線を送つてきているのは由良栄夢だ。栄夢とは一年の時に同じクラスになってからの仲だ。因みに出会いは可愛いもの好きの『僕』が背が小さい栄夢に抱きついたのが始まりだ。

「やつぱりね。テストが始まつて直ぐに雪^{ゆき}が寝たからこうなるような気がしたんだ」

皆は二重人格だと名前が紛らわしいからという理由で『僕』の方を雪と呼ぶ。俺としては名雪のまま通してくれてもいいんだけど。

しかし、『僕』よ。問題を解いていないのはかなーり妥協しても名前も書いていないのはどうかと思うぞ。いつなると『僕』の方は最初からやる気なかつたな。結局補習か宿題をやるのは俺なんだから。こんなことなら今日は俺が最初から出でれば良かつた。表で笑つて心で泣いて。

「なんだよなんだよ、お前らしけた面してんじゃねえよ」

「どこからともなく現れ俺と栄夢の背中をバンバンッと叩いてるこ
いつは武都風勇。風勇も栄夢と同じで一年の時に同じクラスになっ
たのが縁で今に至る。因みに風勇との出会いは『僕』が餌付けされ
たことから始まる。同じ自分としてはいたさか情けない気もあるが。

「風勇は仲間だよな？」

栄夢は頭が良いから聞く氣にもならなかつたが風勇とは時々補習
が被るからな。補習仲間だな。

「半分ぐらいか？」

疑問系で聞かれても困るし・・・風勇が半分つ。五割つ。一つに
一つは正解つ。・・・終わつたな。

「まつ、こつもの」とじゃないか

「やつやつ」

「こつもの」と済まされようとしていることが嫌なんだが。こい
つらは所詮他人事だと思って。

「「だつて他人事じゃないか」」

見事なシンクロ・・・じゃなくてつ、

「お前らいつの間に読心術を身につけたんだ」

一人が俺の知らないところで密かに特訓してきたとか。

ならば俺の思つていいことはこいつらには筒抜け。これからはこいつらの前では下手なことは考えられんな。気をつけねばつ。

「お前また変なこと考えてるだろ」

「やうやく毎回同じ」とやつてたら分かるし、それに・・・

「それ」「?」

「名雪は顔に出やすい」

栄夢と風勇はどこかの名探偵が犯人を指差すように俺にビシッと人差し指を向けてそう言った。

「えいっ」

俺はそんな掛け声とともに一人の手を叩いた。少し強めに叩いたため栄夢が痛がっているがこの際無視だ。

「人に向けて指を指したらダメだと教わらなかつたのか。だから最近の子どもは・・・」

自分の世界に入つてしまつた名雪に栄夢、風勇はお手上げ状態。こうなつた名雪は喋らすだけ喋らないと機嫌が急降下してしまうのだ。それにしても自分も最近の子どもだといふことに気付いていないのはどうなのだろうか。

(2) 僕と友×4

「名雪^{なゆ}、栄夢^{えいむ}、部活へ行くぞつ」

ホームルームが終わつた途端に大きな声で僕と栄夢君に話し掛け
てきたのは同じクラスの風勇君。

「僕は名雪^{なゆ}じゃなくて雪^{ゆき}だよー」

いくら体が同じだからって名雪と僕ぐらい見分けて欲しいよね
？ 間違えられるのつてちょっとこむんだから。

「ああ、すまんすまん。アメやるからな」

そう言つて風勇君が取り出したのは僕の大好きなアメ。

「風勇君は仕方ないなあ

アメ一つであつさり態度が変わる僕だけど、誰でもこんな風じや
ないんだよ。二人を信頼してるからこそなんだよねー。名雪は恥ず
かしがつて言わないけど名雪も一人のこと信頼してるんだからね。

「ああ、雪行^{ゆけ}」

黄色のアメを眺めていた僕、だけど栄夢君に促されて一人に続いた。
アメは食べても美味しいし、光に当てて眺めるのも好きなんだよね
ー。黄色つてことはレモン味かな？

「新入部員来てつかなあ」

そう呟いたのは風勇君。僕ら三人は天文部員なんだよ。天文部は僕らと後二人の女の子で構成されてるんだよ。おまけに僕ら五人で天文部作つたんだよね。部長は風勇君なんだよ。それで副部長は栄夢君なんだ。

「うーん、あのポスターじゃなあ」

僕の方をチラツと見ながら栄夢君がそう言った。なんでだろ？
僕は眞面目に『星になりましょつ』って田立つように赤のマジック
で書いただけなのに？？？

「大丈夫だ。俺の従妹が入つてくれるみたいだ」

びっくりだよー。

「風勇君に彼女がいたなんてー。栄夢くーん、僕捨てられちゃつた」

「おー、よしよし。風勇はロリコンでシスコンだったんだよ。仕方
ない」

「止めてくれ、お前らが言つてことは皆なぜか信じてしまう節がある
んだ」

「えー、冗談じゃないのにー」

「余計に悪いわっ」

わっ、唾が飛んできた。風勇君ばっちいよ。その彼女に嫌われち

やつよ。

「風勇も雪もこいつまでも争そわない。もつ着いひやつたよ」

栄夢君も楽しんでたくせこ・・・。まあ、いいや。だつて、扉の向こには・・・、

「雛ちやーん」

宇都夷雛ちゃん。僕が抱きついで唯一文句を言わない子なんだ。
もとから無口、無表情というのもあるかもしけないけどね。雛ちゃんは栄夢君より小さくて可愛いんだよ。それで大体難しい本を読んでるんだ。

「・・・おはよー」

雛ちゃんは本から目を外してそれだけ言つとまた本に没頭し始めた。これはいつものこと。そして、もつ放課後なのがおはようといふのもいつものこと。一度何でおはようなのか訊いてみたらその日に初めて会った人には昼間だらうと夜だらうとおはよつて言つんだつて。

「うん。おはよー」

だから僕もおはよーなんだ。僕は雛ちゃんが座つているソファの隣に改めて座りなおす。そして、キヨロキヨロ。

「夕陽ちゃんはまだなの？」

夏野夕陽ちゃんがもう一人の女の子の天文部員。スポーツが得意

なんだけどなんでか天文部に入ってるんだ。僕は嬉しいんだけどね。

「夕陽ひやんないな」

風勇君が確認するよつにそつ言ひへ。夕陽さんはムウドメヒカアだからね。そんな風に思つてると廊下からドタドタと駆ける音が聞こえる。すぐに分かる。

「夕陽ひやんだあ」

僕はそつ言つて扉の前に準備する。3・・・2・・・1・・・

『ガラツ』

「じめん、遅れヒガツフ」

息も絶え絶えな夕陽ちゃんにダイビング。

「（ガツフ？？？？）」「（ガツフ？？？？）」

風勇君、栄夢君、離ちやんの心が一つになつた瞬間でした。一方で抱きつかれた夕陽ひやんは・・・

「あ、今日は雪なのね」

至つて冷静だった。そつ、天文部ひとつで雪の抱きつきダイビング行為は二つものことなのだ。

「夕陽ひやん今日はどうしたの？ 僕、心配したんだよ」

そんな天文部にもどうしても慣れないものがあった。それは雪の満面の笑顔と潤んだ瞳で見つめられることだった。

「ああ、『じめんねー』。ちよつと呼ばれててね」

これも天文部ではいつものことなのだ。夕陽はモテるのだ。性別を問わず。そんな夕陽は今まで告白をOKしたことはない。理由・・・ときめかないから。そんな夕陽だが雪の潤んだ瞳に耐えられず・・・

「アーネンナセー」

特に夕陽が悪いわけではないのだが何となく謝らなければならぬ
いような気になるから不思議なのだ。天文部の七不思議の一つにな
つてゐる。

「・・・夕陽・・・綺麗だ」

今までジツと夕陽を見つめていた雪がそんなことを口走ったのだ。

卷之三

綺麗だ、と言つた雪の顔は何よりも美しくて赤かつた。

(ん？ 赤い)

この場での赤いは照れてではない。廊下側の窓の外には赤々とした夕焼けが澄み渡つていた。

「皆一、写真撮りつけ」

天文部にはカメラがある。時を手に入れることは出来ないけど、今この一瞬を止める方法はある。

「だな」

「だね」

「・・・うん」

「・・・／／／」

夕陽の顔は夕焼けとは関係なく赤かった。心臓がドキドキとじるさかった。幸いにも皆が気付くことはない。カメラをタイマーでセットした風勇が急いで並ぶ。後、一秒でシャッターがおりる。

2

「皆・・・」

1

「・・・だーい好きだよ」

「」「」「う」と「」「」

0

『パシヤ』

『真に写つたのは皆のキラキラした笑顔。バックの夕陽も皆の輝きには敵わない。

(3) 僕と僕と友×4

天文部。それは本来星を観察する部活だ。それだけ、というわけではないが活動内容の大半はそれだ。しかし、時たま天文部部長である風勇が思いつきで何かを始める時があるのだ。そして、それに悪乗りするのが夕陽さんなんだ。そうして、そのまま栄夢、ひな、俺、と巻き込まれていくのだ。

風勇の思いつきはある時はスパイゲームと名付けられた高度な缶ケリだつたり（鬼は一人）、コソドロゲームと言つて親分一人と子分四人に分かれて親分が命令したものを持つてこなければならぬゲーム（お金を使うことは禁止、更に持ち出すところを誰かに見られてもダメ）だつたりするのだ。

そして、今回風勇が考えたゲームとはその名もグラムゲーム。内容は重さを指定して、その重さに出来るだけ近い物を学校内で探すというものだ。今回は割と楽な方だ。走つたりすることもないし、無駄にドキドキすることもない。因みに一番値から遠い物を持つてきた人は全員にハンバーガーを奢るという罰ゲーム付きだ。こういうのは皆がやる気を出してやらないと面白くないから罰ゲームがあるのだ。今回の指定グラムは700グラム。

俺・・・本・・・895グラム。

栄夢・・・地球儀・・・688グラム。

風勇・・・教頭のカツラ・・・701グラム。

雛・・・サッカーボール・・・440グラム。

夕陽・・・700ccの水・・・700グラム。

「わーい、名雪の奢りだね」

そんなことを言つたのは夕陽さんだ。

「ちよつと待て」

自分でも驚くぐらい低い声が出たぞ。夕陽も普段の声と違うのを微妙に違つのを感じとつたのか少し汗をかいてるようにも見える。風勇のカツラにもつっこみたいがそれよりつこまなければならないのは明らかに夕陽だ。計量カップで700cc計つて持つてくるのはいかがなものだらうか。そんなの700グラムになるに決まつてゐじゃないか。

「言い訳があるなら言つてみたまえ、夕陽くん」

当社比三倍の笑顔で見つめると、夕陽さんの汗の量も三倍になる。

「まあまあ、一人とも落ち着け。名雪も男なら素直に負けを認めろ」

俺と夕陽さんの間に入つて来たのは風勇だ。

「やうやく、諦めが悪いよ」

朱夢まだそんなことを言つ始末。俺がとつた行動は・・・

「あれっ？ 名雪はもう二つなの？」

突然の選手交代に戸惑つ雪。

「「「（逃げた！？！？！？！）」「」「」

「あつ、離ちやーん」

ボフッといつ音を立てて抱きついた僕。雛ちゃんは頭をナデナデしてくれる。子ども扱いされてるみたいだけど雛ちゃんから見れば僕は子どもだらうから何にも言えないんだよねー。

「ど、どつあえずどうしようか?」

栄夢君が困ったようにそつまづつ。名雪が勝負で負けちゃったんだよねー。僕がやれば勝つてたと思うのになー。風勇君も夕陽ちゃんもどうしようか考えてるみたいだしねー。雛ちゃんはまだナデナデしてくれてるし。

「じゃあ、もう一回しようよー。次は1000^{せん}匁ねー」

そう言って走り去つて行つた雪を見送ることしか出来なかつたのは栄夢、風勇、夕陽だつた。三人は一斉に首を捻る。

「　　1000匁つて何グラムよつ?」「　　

雛はとこつと・・・

「(・・・1匁はおよそ3・75グラムだから1000匁は3750グラム・・・)」

博識な雛さんでした。

結果、哀れにも栄夢君が奢ることになつたそつです。

(4) 僕と俺×オセロ

「ねえねえ、そういうえば風勇君が言つてた従妹の子は部活にこないの？」

僕は一、三日前に風勇君がそんなことを言つていたのを思い出してそう訊いた。

僕の隣を歩いていた栄夢君もうんうん、と頷いている。

部活は五人でも出来るけど人数が増えて友達が増えることは良いことだよね。けど、風勇君の従妹さん一人だけじゃ僕たちが一斉に卒業した時に困るよね。

「今日来るぞ」

何気なく風勇君が言つたけどそこには声を大にして言つところだよつ。

「お前なあ、そつ言つことはあらかじめ言つておいてくれよ。一人で部室にいたらどうするんだよ」

僕なら寂死しちゃうかも・・・それはいくら僕でもないよね。僕には名雪^{なゆ}がいるしね。一人でも一人だもんね。

「言つてなかつたっけか。そりやあすまん。けどそんなことでめげる我が従妹ではないつ。あいつならサバイバル訓練受けてたことがあるから・・・ん？ サバイバルか、それいいな。今度はサバイバルゲームをしよう！」

サバイバル訓練ってなんだろ。面白そだだから僕も教えてもらお

うかな？ それにしても風勇君って遊ぶことばかり考へてるよね。だから他の生徒たちから遊部あそぶなんて言われたりするんだろうね。

「サバイバルなら迷彩服と・・・」

一人の世界に入り込んでしまった風勇君は放つておひつ。大丈夫。風勇君はちょっとやそつとじや死なないんだから。

「栄夢君、新入部員さんつて一人だけかなあ」

ポスター描いたの僕だから少し、ほんのちょっとぴりだけ责任感感じちゃうよ。僕が俯き加減に歩いていると栄夢君は僕の頭をポンポンと叩いた。

「気にならダメだよ。元々、天文部なんてマイナーなんだからさ。皆、いつからか空を見ることを忘れちゃって下ばかり向いて生きてしまつものなんだよ」

「う、難しい。けど、少し分かるような気もする。子どもの頃とかは空を見て星を眺めて、月のウサギを探して、飛行機雲を目で追つて・・・けど段々年を重ねていくと上を見上げることに疲れちゃうんだ。だから下を向いちやうんだ。自分より下を見て何かを得たいんだ。見つけたいんだ。下を向くことでなくした大きな夢を。

「ロケット飛ばそうよ。ローンとさ」

僕たちはまだ見失つてないんだ。だから夢に届くよつてひこまでも飛ぶロケットを飛ばしたいなー。

「それいいぞっ。良くやつたぞ雪ひ」

さつきからずっとビッグバン語りた風勇君がロケットについての言葉に反応した。そんなにキラキラした田で見られると照れちゃうよ。

「口ケツトか、それもいいかも」

栄夢君も賛成してくれた。
離ちゃんと夕陽ちゃんもさっそく賛成してくれるとと思つ。

「アツツーイー！ー！」

部室に入る直前にそんな大きな声が聞こえた。声の主は夕陽ちゃんだね。僕はそんなことをのんびりと考えていたんだけど、栄夢君はその声に慌ててドアを開けて部屋に飛び込んだんだ。続いて風勇君もどうしたのかと入つて行く。もちろん僕も続いたよ。

部屋に入ると夕陽ちゃんは普通にソファに座つてゐる。その手にはコップを持つて。そういうば夕陽ちゃんつて猫舌だつたつけ。

「雛ちゃん」

僕はそう言つて固まつてゐる栄夢君の横を通り抜けていつも通り本を読んでる雛ちゃんに抱きつくる。一日一回はこうしないとね。

ଶ୍ରୀମତୀ ପାତ୍ନୀ

離ちやんも動じる」となく挨拶していく。

「ウニタ、アサヒー」

風勇君は心配して損したつて感じでソファに飛び込んだ。いつも占領しているソファに。けど、今日は先客さんがいたみたいだね。ソファの端っこにちょこんと座つていた一年生らしい女の子の膝の上に頭が乗つた。風勇君はあれ?、いつもより柔らかいなあつて女の子の太ももを触つてる。風勇君・・・変態さんだ。女の子はワナワナと肩を震わしてゐるし。ああ、あれだね、

「アーティストの才能」

「セクハラ」

僕と （おまかせ） **ちゃんの言葉でスイッチが入っちゃつたみたいだよ。**

「兄さんつ、少しいいかな」

女の子は地を這うような声でそう言つたけど最後は疑問系じゃなくどちらかといえば命令形のような気がしたんだ。その証拠に女の子は風勇君の首根っこを掴んでズルズルと引き摺りながら部屋を出てつちゃつた。それから開け放しのドアを栄夢君がそつと閉めたのが印象に残つた。

「アの外がなんだかつるさいにけど、反正にしない方向みたい。離ち
やんは本を読んでるし、夕陽ちゃんはお茶を飲んでるし、栄夢君は
地球儀をぐるぐる回してる……。暇なんだね。

「それでは第三回才セロ大会をやろー」

僕の場違いとも言える言葉でも今は皆がありがたいといつ感じでワラワラ集まって来る。天文部にないものはないからね。オセロべらーこセシト常備してあるんだよ。

「いいねー、雛もやるでしょ。あと、栄夢に拒否権はないから」

「・・・やね」

「えつ、強制なのつ」

雛ちゃんも少しやる気だし、栄夢君もそんなこと言つてるけど楽しそうだしね。夕陽ちゃんはノリノリだしね。僕も負けないけど。

「はいはーい、罰ゲームはびひつあるのー」

僕がそつ言つと夕陽ちゃんが少し考へるよつた仕草をしてから言った。

「風勇のあと始末・・・」

一ヤリつて言葉が似合ひそつた顔でそつ言つた。その言葉で和氣藹々という感じだった雰囲気がピシリと固まつちやつた。それぞれがやる気をフルで出したような感じだった。

そうして始まつた総当たりのオセロゲームの結果は・・・

第一位 三勝 雛ちゃん

頭脳的作戦で勝つたみたいな感じだったよ。雛ちゃん強い。

第一位 一勝一敗 栄夢君

のほほんしてて勝てやつなのに最終的には何故か勝ってるんだよねー。ふっしぃゃー。

第三位 一勝一敗 夕陽ちゃん
やる気が空回つしてたっぽかったのに勝てなかつた。・・・僕弱い?

第四位 三敗 僕
僕・・・才能ないかも。といつことあとは雪に交代。

「ちよつと待て。俺は負けてないから生ハリの処理なんかしないぞ
俺は負けてない『僕』が勝手にやつたことなんだからな。そんな俺の思いを察してくれたのか夕陽さんが俺の肩に手をポンッと置いた。

「男は諦めが肝心なのよ」

「・・・哀れ

離せん。何気にズキンっとくるのですが。

「さすが苦労人の名を欲しいままにする名雪だ」

栄夢もわづ感慨深げに言わないでくれ。泣けてくるんだ。

「じゃあね、今日は楽しかったよ」

「ああ、お前、りんな

「・・・参め」

「だと思つた」

「せ・・・」

「でしょ」

「まあまあ、明日アメ持つてきてやるよ」

「別に俺は『バタン』・・・最後まで聞いてくれ」

思わず一言語でそう言つてしまつた俺。風勇？　ああ、雑巾のようになつてボロボロになつていていたのを見つけました。もうひんぱつらかにしてきましたけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5922d/>

僕と俺の学校生活

2010年10月14日17時21分発行